子どもの心に寄り添って

（わけへだてなく）

（鹿児島県人権啓発キャラクター）

鹿児島県教育カウンセラー協会代表
上級教育カウンセラー　　石 塚 勝 郎

Ⅰ　はじめに

1　リチュアル
2　ひと言
3　学びたいこと

（1）　人権や人権問題について（基礎基本）
（2）　人権が尊重され,人権問題のない社会（学校）づくり
（3）　教師としての基本姿勢（哲学）

Ⅱ　人権とは

○　すべての人間が生まれながらにしてもっている権利

○　人間が人間らしくいきていくための，誰からも侵されない基本的な権利

○　個人として尊重され,安全で安心して生活を送るために欠くことのできない権利

○　人権の尊重は人類普遍の原理であり,基本的人権の尊重は,日本国憲法の基本理念の一つとして,すべての国民に保障されたもの

鹿児島県人権教育・啓発基本計画（2次改訂　P3）

Ⅲ　人権問題（差別）とは

- **人を軽蔑（ばかに）すること**
  人の価値を認めないこと
- **人を排除（仲間はずしに）すること**
  人の平等性を侵すこと
- **人に傷害（傷）を与える（いじめる）こと**
  人の心や体を傷つけること

奪ってはならない　侵してはならない　*傷つけてはならない*

―基本的人権の根幹にあるプリンシプル（原理・原則）―

1　さまざまな人権課題

1　女性　2　子ども　3　高齢者　4　障害者　5　同和問題
6　外国人　7　HIV感染者等　8　ハンセン病患者・元患者等
9　犯罪被害者等　10　インターネット等による人権侵害
11　北朝鮮当局による拉致問題等　12　災害被災者
13　LGBT　14　刑を終えて出所した人　15　アイヌの人・・・・・

- 個々の人権課題に対する正しい認識と理解
- 人権侵害のない社会の実現に向けた積極的取り組み

2　繰り返される子どもの人権侵害

① いじめ問題	子ども（友だち）同士で
② 虐待	親が子を，大人が子どもを
③ 体罰	教師が子どもを，大人が子どもを
④ インターネット等による人権侵害	SNS・・・
⑤ 性同一性障害（LGBT）	理解・認識
⑥ 子どもの貧困	貧しい生活から
⑦ 同和問題	部落差別
⑧ 性的被害	援助交際，強制わいせつ
⑨ いやがらせ	セクハラ，パワハラ，モラハラ・・・

Ⅳ　人権同和問題をなくするために

1　人権問題に対する正しい認識と理解を

自分自身の中に潜む差別心に気づき，差別される人の思いをわかり寄り添う　自己認識

① 自らの差別心を認識し　「だれのこころにも」

○ 自分の心にも人を差別する心が潜んでいる

② 被差別者の思いを理解し寄り添う　「木の皿」

○ 差別される人の思いを理解し寄り添う

2　みんなで一緒に生きていく（共生する）心を

自らの人権を大切にすると共に，人の人権を侵害しないという自分づくり　自己啓発

（1） 思いやりの心を持って人と接する　「島田洋七」

（2） 相手の立場に立って人と接する　「森繁久彌」

（3） 人の心の痛みに寄り添って　「世論の例」

3　人に訴える（人権同和教育）

自己啓発（自分づくり）の姿を通して人に訴える　他者啓発

（1） 人権同和教育の時間に

（2） すべての教育活動の中で

（3） 自分の姿（言動）を通して

Ⅴ　学校教育における人権同和教育

1　学校においては

○ 人権に関する正しい理解と認識を深め，人権感覚を高めて，子どもの心に寄り添う人権教育を

すべての学校で
すべての教職員が
すべての児童生徒を対象に
すべての教育活動を通して行う

→

お互いに同僚性を発揮してチーム学校として学校をあげて人権同和教育に当たる

2　凝集性のある学級づくり

① クラスメートの気持ちを代弁できる。
② 無理強いをするクラスメートに「やめろよ」と言える仲間がいる。
③ クラスメートをかばう仲間がいる。
④ 困っているクラスメートを見ると援助する仲間がいる。
⑤ 一人ぼっちのクラスメートがいるとそばに寄り添う仲間がいる。
⑥ 元気のないクラスメートを見ると声をかける仲間がいる。・・・

↓

○ ルールとリレーションが確立し，お互いが補助自我となっている
○ 不登校，いじめ，非行，学級崩壊などのない学級

3　子どもの心に寄り添って（基本姿勢）

①　信念（自らの生き方）を持って

○　信念を腹から腹へ移すなり

・　伊藤茂光 「校長ありき」（神楽子治） 部落問題研究所

（人権）同和教育は，知識に非ず，理屈に非ず，況や術に非ず，読み方（国語）や算術（算数・数学）は，知識の伝授を主とするが，（人権）同和教育は，信念を腹から腹へ移すなり。

人を賤視差別してはならぬといくら言うても，躬行しなければ，何の役にも立たぬ。

○　優勝なんか欲しくない。君たちの人間性がほしい。「高校生」

② 深い教育愛を

○ 命の響き合い（参考資料） 「教師の心」

③ 子どもの心を見ぬく目と心を 「児童生徒理解」

○ 縁を生かす（参考資料）

○ ポケットの中のにぎりこぶし 「中2男の例」

④ 子どもの味方となって 「味方意識」

○ 今なら言えるありがとう（小2作文）

4 自己肯定感を育む三つの言葉かけ

○ いいところ探し

・ 子どもの良いところに視点をあてた言葉をかける。

「きのうは野球で疲れていたのに，よく宿題できたなあ」

○ リフレーミング

・ 子どもの見方，考え方に対する意味を変えて言葉をかける。

「ぼくは，せっかちだといつも言われるんですよ。」
→「そうか，君は活発で行動力があるんだよ。」

○ 勇 気 づ け

・ 子どもの勇気を育む（ほめる，勇気づける）言葉をかける。

「ありがとう（感謝），うれしいよ（喜び），助かったよ（お礼），すごいなあ（尊敬）・・・など」

Ⅶ お わ り に

○ わけへだてなく （体験から）

御清聴ありがとうございました

＜参考資料＞
・鹿児島県人権教育・啓発基本計画―鹿児島県
・なくそう差別，築こう明るい社会―鹿児島県教育委員会（H23～H30）
・心に響く小さな物語―藤尾秀昭（致知出版）
・校長ありき―神楽子治（部落問題研究所）
・佐賀のがばいばあちゃん―島田洋七（徳間文庫）
・いのちの響き合い―池水浩三郎（高城書房）
・母のいのち子のいのち―東井義雄（探求社）
・孫への語り置き―川邊盛幹（高城書房）

資料１

だれの心にも

北九州市内　小学校五年生　女子

差別すまい。
いつも思う。
だけど、どこかで差別している。
あの人がいないと班がうまくいくのに、
あの人がいないとおそうじも、
さっさとできるのに。
あの人がいないと漢字競争も勝つのに。
いけない、いけない
また心の中で、差別する心が勝つ。
悲しいけれど、
これは本当のことなのだ。
みんなの心の中もそうだろうか、
そうだと思う。
こんな心が少しずつでもなくなったら
差別がなくなるかもしれない。

（一九八二年　人権週間応募作品）

優秀賞（低学年）

今なら言える、ありがとう

湧水町立吉松小学校　二年

「もう学校へ行きたくない。」
一年生になった五月のある日、ぼくは、お母さんにこう言いました。
ぼくは、じぶんから友だちにこえをかけることができませんでした。だから休みじかんになると一人で校ていをはしったり、図書室で本を読んだりしました。
ある日、友だちからわる口を言われたり、たたかれたりするようになりました。そんなまい日がつづいて、学校にいってもぜんぜんたのしくありませんでした。お母さんは、まい日ぼくが学校からかえってくると、
「きょうはどんなことがあったの。」
と聞いてきて、ぼくはいつもうそをついていました。なぜなら、お母さんをしんぱいさせたくなかったからです。
でもある日、またお母さんにうその話をしていると、たくさんのなみだが出てきて、とまらなくなりました。気がついたら、おなかのそこから大きな声で、
「もう学校へいきたくない。」
とさけんでいました。それを聞いたお母さんも、たくさんなみだをながしながら、
「ごめんね、気づいてあげられなくて。お母さんは桜祐のみかただからね。」
と言ってぼくをだきしめました。
よく朝、ぼくはお母さんといっしょに学校へいきました。げんかんでお父さんに、
「お父さんも桜祐のみかただ。こわがらずにぜんぶ話してこい。」
とはげましてくれました。
学校について、先生にぜんぶ話をしました。スッキリしました。それから、友だちもできました。
お母さんは、今でもまい日、
「今日は、どんなことがあったの。」
と聞いてきます。ぼくは、今はしょうじきにこたえています。
学校はとてもたのしいところだとおもえるようになりました。
「お父さん、お母さん、ぼくのみかたになってくれて、ほんとうにありがとう。」

資料２

コロナの爪痕

与論の元感染者に聞く

同僚の「お帰り」にうれし涙

10/5(月)南

④ 復帰

8月6日に与論町の職場へ復帰する。「勤務中に笑ったら『何を笑っているんだ』と怒られるんじゃないか」「近くを通ったら避けられるんじゃないか」。差別を受けることへの不安は大きかった。

当日は知り合いに見つからないよう、いつもと違う道を通って出勤した。駐車場で車を降りたが、なんだかぎこちない歩き方になってしまう。同僚に会うのがとにかく怖かった。

職場に着くと同僚の姿が目に入った。なんて言えばいいんだろう。まずは謝らなければ。その前に同僚が笑顔で「おう！「お帰り」と、私が夏休みから帰ってきたかのように話しかけてくれた。感染前と何も変わらない同僚の言動に、うれし涙が出そうになった。私もいつも通りに振る舞わなければ。涙をこらえて声を振り絞った。

「ただいま」

木の皿

昔，夫婦と老人と四歳になる子，四人が一緒に住んでいました。老人は年をとって食べものをこぼし，汚らしくよごすようになりました。

そこで，夫婦は老人をテーブルではなく，ものかげで食べさせることにしました。老人は涙をためため，ため息をつきましたが，何も言いませんでした。

老人はますます年をとり，手が振えて不自由になりました。そして，陶器の食器をある日落としてこわしてしまいました。

夫婦は，これからも壊されてはかなわないので老人には粗末な木の皿をあてがうことにしました。

四歳の子がしばらくして，木片を刻んでいるのを夫婦が見つけました。

「坊や，何をしているの？」

「木でお皿をつくっているの」

「そのお皿何するの？」

「うん，ぼくが大きくなるころは，パパもママも年をとるだろう。そのころ，このお皿ができあがるから，これでごはんを食べさせてあげるの」

夫婦はびっくりして，老人を元どおりテーブルにつかせ，陶器の食器で食事をさせることにしました。

「グリム童話」より

資料３

若い目

いじめに負けない心

亀山小4年　川野　桃菜

「いじめ問題を考える週間」で、すごろくゲームをしました。自分のことをみんなに知ってもらったり、友達のことをもっと知ったりすることができました。

そして、いじめについて先生の話を聞いて、標語を作りました。ろうかにかざられた標語の中でも一番心に残った標語は、「いじめに負けない心を持ち続けよう」でした。

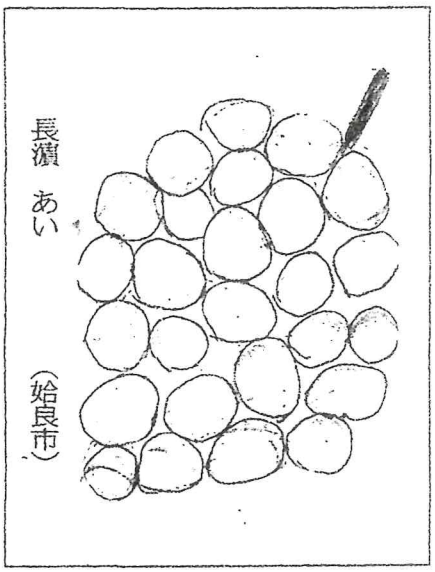
いろいろな活動の中で心に強く残っているのが、「いじめはいつ、どのクラスで起きてもふしぎではない。だから、いじめに負けない心を持ってください」という先生の言葉でした。

そのためには、自分のことをもっと好きになることや自分に自信を持つことが大事だと考えました。

いじめは人の心をきずつけます。だから私は絶対、人をいじめることはしません。

「いじめを許さない心」と「いじめに負けない心」を持ち続けて、楽しい学校生活を送りたいと思います。

（薩摩川内市）



長濱　あい（姶良市）

強い心で流されずに

国見中3年　園田　南

「いじめ問題について考える」をテーマにした人権教室がありました。県教育庁から講師が来校し、さまざまな活動を行いました。

初めに、ある二つのエピソードを読み、その中で私たちの中にある固定観念の危険性を学びました。また、体に障がいのある小学生が書いた作文を読み、周囲の人々との関わり方の難しさを感じました。後半には、無料通信アプリLINE（ライン）上の会話をきっかけに自殺を余儀なくされた女子高校生の実話をもとに、いじめ問題についてみんなで考えました。

私は、陰口や悪口を言われてとても傷ついたことがあるので、1人を集団で責めるようなことは絶対にしたくありません。だから、強い心を持ち、周りに流されずに行動していきたいです。また、感じ方や考え方は一人一人違うので、ささいなこともやわらかい言葉遣いで話すように心がけていきたいです。

私たちは3年生となり、中学校生活も残すところあと1年になりました。小学校から今まで常に一緒に過ごしてきた9人の仲間とともに、残りの中学校生活を充実させ、思い出をいっぱいつくりたいです。

（肝付町）

私は私　一人一人違って当たり前

薩摩中央高2年　小川　慈英

私は初対面の人に、いつも同じ質問をされる。「どこのハーフ？」。茶色の髪、茶色の目、真っ白い肌。目立ちたくなくても目立ってしまう。

正直に言うと、居心地は良くない。小学生の頃はコンプレックスでしかなかった。「いじめに遭うかも」と不安に思っていた。好奇の目で聞かれるいつもの質問に答えるのも嫌で、誰とも話さない方が楽だと考えた日もあった。

私の不安に反して、これまでいじめられたことはない。それはとても幸運だったし、周りの友達や環境に感謝している。ありのままを認めてくれる友達のおかげで、私のコンプレックスは今、半分くらい「自信」に変わってきている。「私は私」。そう思える。

外見に悩み苦しむ人は多い。外見を「いじる」のではなく、仲良くなるための、理解するための接点として質問してくれるのはうれしい。外見も中身も、一人一人違うことが当たり前。そういう考えが、早く世の中の「当たり前」になってほしい。

（さつま町）

資料４

ひろば

鹿屋中央の敗者への思いに感動

非常勤講師　二ノ方昌俊(69)

大隅勢初の夏の甲子園出場を果たした鹿屋中央が延長戦の末、サヨナラ勝ちで1勝を挙げた。なんともうれしいことであったが、その瞬間のてん末に、敗者への思いやりと感動があった。

勝敗を分けた場面、それまで好プレーを続けていた相手の二塁手が、球場やテレビで見ていた誰もが「あれっ、何で？」と思う、およそ考えられないミスをしたのだ。肝心な場面で混乱状態になったらしい。一瞬後、事の重大さに気付き、泣き崩れたという。

その時、たくさんの視線を浴びた彼の心境はいかばかりだったろう。それをおもんぱかると、今でも胸が痛む。

16日付の本紙の「ホイッスル」を読んだ。それによると、その後、鹿屋中央の同じ二塁手が彼の肩を抱き、慰めていたという。何という心温まるシーンだろう。また、この事を知った山本監督の「彼が野球を嫌いにならなければいいが…」という気遣いも、実に人間味あふれる温かい言葉である。

念願の1勝を果たした喜びに浮かれず、相手を思いやる心あふれる、こんな素晴らしいチームが鹿児島県代表であることを誇りに思った。

かの選手のその後も気になるところだが、チームメートも決して彼を責めず、温かく迎え、いっしょに戦えた喜びを感じ合ったことだろう。「逆境こそ、自分を育てる絶好の機会」。大きな何かを得た彼も、きっと新たな挑戦を期し、前進していくに違いない。

2回戦で敗れた鹿屋中央だが、今後一層の飛躍を期待している。（鹿児島市）

子どもの心に寄り添う

生活が教育します（親や教師の後姿が大事）

- ○ うれしい時に、一緒になって心から喜んでくれる。
- ○ 悲しい時に、一緒になって泣いてくれる。
- ○ 悪い時に、本気になって叱ってくれる。
- ○ 困った時、悩んでいる時に、一緒になって考えてくれる。
- ○ 常に、わけへだてなく公平に接してくれる。

こんな親や教師でありたい（共感）

資料５

子どもたちに思いをめぐらしながら，読んでみましょう。

縁を生かす

その先生が五年生の担任になった時，一人，服装が不潔でだらしなく，どうしても好きになれない少年がいた。中間記録に先生は少年の悪いところばかりを記入するようになっていた。

ある時，少年の一年生からの記録が目に留まった。「朗らかで，友達が好きで，人にも親切。勉強もよくでき，将来が楽しみ」とある。間違いだ。他の子の記録に違いない。先生はそう思った。

二年生になると，「母親が病気で世話をしなければならず，時々遅刻する」と書かれていた。三年生では「母親の病気が悪くなり，疲れていて，教室で居眠りする」。三年生の後半の記録には「母親が死亡。希望を失い，悲しんでいる」とあり，四年生になると「父は生きる意欲を失い，アルコール依存症となり，子どもに暴力をふるう」。

先生の胸に激しい痛みが走った。だめと決めつけていた子が突然，深い悲しみを生き抜いている生身の人間として自分の前に立ち現れてきたのだ。先生にとって目を開かれた瞬間であった。

放課後，先生は少年に声をかけた。「先生は夕方まで教室で仕事をするから，あなたも勉強していかない？　分からないところは教えてあげるから」。少年は初めて笑顔を見せた。
それから毎日，少年は教室の自分の机で予習復習を熱心に続けた。授業で少年が初めて手をあげた時，先生に大きな喜びがわき起こった。少年は自信を持ち始めていた。

クリスマスの午後だった。少年が小さな包みを先生の胸に押しつけてきた。あとで開けてみると，香水の瓶だった。亡くなったお母さんが使っていたものに違いない。先生はその一滴をつけ，夕暮れに少年の家を訪ねた。雑然とした部屋で独り本を読んでいた少年は，気がつくと飛んできて，先生の胸に顔を埋めて叫んだ。「ああ，お母さんの匂い！　きょうはすてきなクリスマスだ」
六年生では先生は少年の担任ではなくなった。
卒業の時，先生に少年から一枚のカードが届いた。
「先生は僕のお母さんのようです。そして，いままで出会った中で一番すばらしい先生でした」
それから六年。またカードが届いた。
「明日は高校の卒業式です。僕は五年生で先生に担当してもらって，とても幸せでした。おかげで奨学金をもらって医学部に進学することができます」
十年を経て，またカードがきた。そこには先生と出会えたことへの感謝と父親に叩かれた体験があるから患者の痛みが分かる医者になれると記され，こう締めくくられていた。
「僕はよく五年生の時の先生を思い出します。あのままだめになってしまう僕を救ってくださった先生を，神様のように感じます。大人になり，医者になった僕にとって最高の先生は，五年生の時に担任してくださった先生です」

そして一年。届いたカードは結婚式の招待状だった。
「母の席に座ってください」と一行，書き添えられていた。

藤尾秀昭著「小さな人生論③」（2007年　致知出版社）より